「発展の固有性」⇔オリエンタリズム

——進化論的時間の語りと切断された停滞の語りとのループとしての——

崎山政毅

まず、「発展」の位置ということから考えていきたいと思っています。「発展」ということを語るというのは、やはり非常に政治的なものであるということを最初に押さえておかなくてはなりません。これはもちろん、本日の一方のテーマであるオリエンタリズムとも絡んでいるわけですが、発展をそのまま政治的な文脈で押さえるということではなく、発展を語るということ発展と向かい合う、そしてまた発展にどうやってアプローチするのか、という二点においてどうしても政治性、ある種の党派制を帯びざるを得ない、ということです。

さて、私がいいますこの「発展」というのは、本日の発表の中ではとりわけて経済発展というものに意味を限定しておきたい。全体的な社会発展などといった使われ方があるかもしれませんが、特に後に述べますニカラグアの問題と絡めても、経済発展というところにその意味をなるべく限定するというよりもむしろ収束させて考えていきたい、と思っています。

さて、経済発展といったとき、それがどのような設定になるのかということを次に考えていきたい。まずここで環境というものを、そこに存在する関係の総体として考えたとき、おそらく経済発展というのはその中の一個の、特に今現在の社会における支配的な力の秩序を見つけだしていこうとする、そのような発展の道筋の設定にあるだろうと思われます。というのは、環境がそこにおける関係の総体である以上、非常な複雑さをもっているわけですが、その複雑性というものを縮退させ、そこに意味を与えていく。その意味自体がヒエラルヒッシュな構造を常にすでに備えた力であるわけですが、そのような意味を形式として与えていくような、一つの認識実践ではなかろうか。このように発展の道筋の設定というものを考えています。

さて、「発展」を考えていく際に漠然と世界大の発展というものを考えようとしてもな

かなか見えてこないし、また経済発展というものを、今考えられ語られている問題設定から逆算しますと、どこからどこまでの発展、どういう領域における「発展」かという地理的なカテゴリーが、おそらくまた問題になってくるだろうと思います。今現在「発展」というときには必ず、地域的な問題はあるにせよ、国民国家というものを考えざるを得ません。この「発展」を経済発展というものにかぎっていえば、プロト工業化期ヨーロッパにおける地域的文脈からグローバルな国民国家へと変遷してきた。それはウォーラーステインが行っているような考え方であり、そのような設定の中ではグローバルな意味での国民国家、つまり遅れている、あるいは進んでいるという隔たりはあるにせよ、そうした分け隔てでさえも生み出していくような国民国家へと地理的なカテゴリーは変わってきたのです。そして、その中でこの「発展」というものが何回も何回も語られてきているのではないかと考えています。そうしたときに、報告のタイトルにある「固有性」ということを——多様性と固有性の二つをあまり乱暴に分けてしまうことは問題であるかもしれませんが——考えておきたいと思います。

「発展の多様性」ということを考える際に、ヨーロッパの経験に学んで第三世界の地域発展、経済発展を考えようといっている、ディーター・ゼングハースという研究者がいます（Senghaas, Dieter, *The European Experience: A Historical Curitique of Development Theory*, Berb, 1985、D. ゼングハース「ヨーロッパの発展と第三世界」I. ウォーラーステイン編著『ワールド・エコノミー』、藤原書店、1991年）。世界の中で、発展の失敗と成功の事例を様々に挙げながら、発展のあり方を考えていこうというのがゼングハースの立場なんですが、彼は、それはいくつかの基本的なパターンに分類できるという立場をとっています。その場合には、この発展の多様性が設定される位相というのは、比較可能な実体としての社会においてです。つまりその社会というのは一個の閉じた系にほかなりません。そのような比較可能な閉じた実体としての「社会」を措定し、その上で「社会」の計測可能な特性として、発展を、成功にしろ失敗にしろ、考えていく作業において見いだされる「多様性」というものが、この場合の「発展の多様性」です。

それに対して、私は非常に漠然とした問題設定だと考えているのですが、「内発的発展論」という考え方があります。その考え方の中では、時に「発展の固有性」ということがいわれます。何をもって「内発」とするかは多くの理論的課題が残されていますがそれはさておき、この場合の「発展の固有性」は、分類の中での「多様性」へと回収されてはならないだろうと思うわけです。というのは、別のところで冨山さんが long-distance

nationalizmの話をしていましたが、必ずどこかで「その土地」という、実体として存在するように観念されるナショナルな語りに、常に強く回収されてしまう傾向をともなった語りとして、「発展の固有性」のレベルが設定されているのではなかろうかと思うからです。

このあと話しますのは、この固有性と多様性というものが様々に入り混じった話になってしまいますので、私自身も混乱するかもしれませんがご了承願います。

「発展」の位置というものを考えた際に、とりわけ第三世界の中で、自分が対象としてきたラテンアメリカの場合、どうしても考えてしまうのはcatch-up型の開発、追いつけ追い越せの後発の利益です。先にヨーロッパが成功した、先に日本が出発して成功したという経験を、自らの経験へと繰り込みながら、どうにか追いついていこうという「開発」が現在の政治・経済では支配的であることは言うまでもありません。しかし、中枢ー周辺という言葉で言ってしまうのが一番楽でしょうが、ある種の支配と従属の相互構造が現に存在している中で、発展は簡単には成しえない、というのがおそらく現在の第三世界の問題ではないでしょうか。

そうした場合に、つまりヨーロッパや日本にモデルや範例を求めないような発展を考える際に、おそらく固有性や多様性といった問題構成の中にあらわれてくる話でしょうが、「ザスーリッチへの手紙の意図せぬ遺産」とでも言いましょうか、非資本主義的な発展、つまり資本主義的な発展ではないalternativeな形の発展の可能性を再考することが求められているのではないかと思います。「ザスーリッチへの手紙」というのは、次のようなものです。ロシアのナロードニキの活動家で、ヴェラ・ザスーリッチという女性がいまして、マルクスに対して手紙を送っているんです。『資本論』では資本制を経ないと社会的な発展というものはないと書かれているけれども、いったいロシアはどうなのか、ぜひ教えて下さいとマルクスに聞いたわけです。

それに対してマルクスは、ロシアの農村共同体をテコにして、非資本主義的な発展もあり得るとして、４つの草稿を書いた上で、簡単な手紙を送っています。農村共同体にかかっている様々な桎梏や阻害要因をはずせば、独自の発展というのがあり得るんだ、と書いたわけです。『資本論』の描いた道筋はすべてにあてはまるものではないのだ、私は西ヨーロッパに限定しているのだとマルクスは言った上で、「ロシアの発展」と特殊な設定をした。つまり資本制の発展と違った、発展に関わる歴史的な時間というものをマルクスは語ったわけですが、しかしその後に、社会構成体移行論争という、今から考えれば非常に不毛な論争を経たあとに、一般的な転化へと移った感があります。特に資本制的な発展に

おいて、歪み、または遅れていると考えられていた第三世界における発展ということにおいては、このような非資本主義的な発展の道筋の構想は、はなはだ魅力的に感じられただろう、ということは疑いを入れない思っています。

その場合にはどういったものが出てくるかというと、「飛び越え発展」というものへの希求が出てくるわけです。植民地状況がいったん政治的な独立によってほぐされても、なお残る植民知的な文脈における、経済的・政治的・文化的な問題も含めて、第三世界の民族解放闘争もしくは革命と、その中から出てきた理論のいくつかの帰結として、資本主義を飛び越えようとする問題がでてきただろうと私は思っています。

この「飛び越え発展」のとりわけ極端な例として挙げられるのは、ポル・ポト政権下でのカンボジアです。彼らは世界的な資本主義との連関を切り、自給自足経済を行いつつ、貨幣を廃絶する、という方向へ向かったのですが、その政策はもともと理論的帰結として決定されていた中身を「実践」に移しただけのものでした。しかし、たとえば非資本主義的な発展といわれたときに、我々の頭に浮かぶのがポル・ポトたちの残酷な「実験」であったりするというのは不幸としか言いようがありません。実際にそういった離脱（delinking）、つまり資本主義との切断と、自分たち自身の力による発展ということを構想し、そこに固有の発展を構想すること自体が、今はそれほど大きな力を持っていないという事実をふまえた上で、このあとに続けて行きたいと思います。

そうした失敗を経た今では、全面的アウタルキー、自給自足経済による自立的発展を政策的に打ち立てるという考え方から「自生的発展」（これはゼングハースが使っている言葉ですが）、または自助的発展という概念へと転進がなされています。この自生的発展、もしくは自助的発展というのは、切断・離脱ということではなく、世界的な経済との統合のあり方、もしくは離脱の程度という、一見二極に分かれたようにみえるけれどもしかし、違ったレベルにおける経済的な関係の調整を考えていくために設定されています。

しかし、一見現実的に見えるこの考えが現実化されると、必ずしも成功しているとはいえない。とりわけそういう場合に文化の問題が出てきます。これはラテンアメリカのみならず、様々なところで同じことはあるわけですが、「重大な内的異質性」（これもゼングハースの言葉ですが）の存在によって発展阻害の「原因」とされるような問題が出てくる、ということです。この「内」というのは、ゼングハースやアミンが国民国家を単位としていることから考えると、国境線によって分けられた内／外であり、ナショナリズムの「我々」と「それ以外」をつくっていく内／外であり、同時にまたオリエンタリズムの中での

「我々」と「彼ら」をつくっていくような内／外であるわけです。このような「内的異質性」を設定することによって、それが発展阻害の「原因」とされていく、というまとめてもよいでしょう。

ただしこの「原因」は、それが悪いというのではなく、様々な形でそれが利用されなかったから、という意味合いを含んでいます。阻害されたのは政策的な誤謬でもあるというように総括可能な形で、この文化の問題は常に「原因」として設定されていく。

さて、このようにみてきますと一般論としてお話しする形になってしまっているかもしれませんが、実はそうではありません。今日お話ししていることには私自身のニカラグアでの経験というものが強く影響しています。

ニカラグアというのは中米にあり、１９７９年７月１９日に、それまで三十数年独裁を保ってきたソモサ一族を倒し、そのあと１９９０年２月の選挙で大統領選に敗れて政権を委譲するまでの１１年間にわたって、ニカラグアはサンディニスタ民族解放戦線という、最初は統一的な反独裁政権だったのが、そのうち次第にマルクス・レーニン主義的な色彩を帯びていった政治党派によって政権を握られていました。サンディニスタの政治は独自の発展であり、独自の革命であり、しかも現実主義的だ、という非常に高い評価を得ていました。このサンディニスタ時代のニカラグアが、自助的、自生的発展ということをかかげていました。社会主義へと移行するのでも資本主義的な発展をするのでもなく、その両方をその場その場において、計画と市場経済をあわせていこうという混合政策です。しかし、その政策が１１年の間に失敗してしまった。なぜこのことを取り立てて言っているかといいますと、ニカラグアの経験というのはラテンアメリカの文脈で言っても第三世界の文脈で言っても、ある種特権的な事例であると思うからです。

といいますのは、一方でポル・ポトの、完全に離脱するような経済での失敗を見て、他方でソ連や中国、キューバのようなやり方もとらないという、あれでもないこれでもないという否定の中で、どうにか残っている道筋をやっていこうとしたことが、その第一点です。しかし、実際の改革を進めていく過程で、脱従属、自分たちの発展をつくり出すために、「自分たち」というものを見つけだそうとして失敗してしまった。

たとえばアルジェリア革命が起こったときに、まず主体としての「我々」に「国民」が設定され、そのあとで発展というものを考えていこうとしたわけですが、今現在様々な形で多様性の抑圧という問題が出てきている。その多様性の抑圧を、発展を求める改革の過程で気づいてしまったという意味で、ニカラグアというのは「特権的」な、おそらく第三

世界革命の中における発展の問題としては最後の、そして最大の失敗事例として特権的なのではないかと考えています。

さてそのニカラグアの、自助的、自生的発展に、「新たなニカラグア人」ということが何度も語られました。そして、常にここに「自立」という言い方が出ていました。こういった場合の「自立」というのは、もちろん、従属から脱するという意味での自立なのですが、これが政治的なアジテーション、イデオロギッシュな形での宣伝文句にとどまらず、自助的、自生的発展の中に繰り返し繰り込まれていっているのです。

この場合の主体設定というのは、「あなたは抑圧から解放されたのだから、明日から農業労働者、主人公としてやっていけるんだ」という意味での自立であり、また新たな未来に向かって自助的、自生的発展を押し進めていくような「主体」としての自立が働いている。その「自立」自体も失敗しているわけですが、同時にこの「ニカラグア人」という形で自立した「主体」を設定しようとして失敗した中で、ポスト・コロニアル的な文脈における「異質」の「発見」があるわけです。

ニカラグアというのはカリブ海と太平洋の両方に開かれた国であり、主要な都市というのは太平洋岸に並んでいます。太平洋側はスペインの植民地であった。スペインが植民地としていた時点では、カリブ海の方はそれほど開発されていなかったのですが、そのうちカリブ海の方からはイギリスがやってきて、イギリスの植民地となっていく。１９世紀に政治的な独立を成し遂げたのですが、政治が行われる対象、様々な形での開発や転換が行われるのはほとんど太平洋岸に集中していました。イギリスの植民地であったカリブ海側は１８９４年に軍事占領によってニカラグアに組み込まれ、国境線の内側に入っているにも関わらず、とり残されたままでした。そこに、ミスキート、スモ、ラマというエスニック・マイノリティが存在したわけです。これらの人々を自立という名において、「新たなニカラグア人」の中に組み込もうとしたのですが、当時のレーガン政権下のアメリカ合衆国が関わった内戦との関係もあって、戦略的な必要から無理矢理村を動かすとか、「こういう形で君たちは働くのだ」ということを押し付けた形になった。それは介入以外の何者でもありません。これが悲劇だったのは、革命という「正義」を冠した介入だったという点にあります。いくら押し付けとはいえ、「発展」の中に自らを見出すことがなかったミスキート、スモ、ラマたちに対して、最低限の政治・経済・文化の保障はされています。しかし、「正義」は当時、その不充分さを糾しえなかった。もちろんサンディニスタに呼応していくミスキートやスモやラマもいましたし、その一方で、CIA がバックアップし

た反政府ゲリラ（コントラ）にも、多くが合流しました。そのどちらでもなく、革命政権の政策を認めずに、積極的に反政府ゲリラの方を手伝うわけではないけれども、消極的にというか、結果的に反政府ゲリラに協力する人々も当然出てきた。

その時点において初めて、この「異質性」の「発見」（誰がどこから誰に対して語ったのかということが問題ですが）が、革命政権によって語られるようになった訳です。これらの事態については後に総括文書が出されましたが、「政策上の誤謬」であるとされています。この「政策上の誤謬」というのは、開発や発展、もしくは自立、自助的・自生的発展をめざす経済政策に照らして間違いであったのであって、開発や発展、革命自体のもっている意味合いを根底的に揺るがすものではなく、はなはだ機能主義的な総括になっている、ということをここでは指摘するにとどめておきたいと思います。

こうしてざっとみてきますと、開発、発展が語られる際の問題がおそらく端的に出てくるのではないか。本日の副題として、「進化的時間の語りと切断された停滞の語りとのループ」とつけましたが、これは何をいいたいかというと、第三世界の側からの発展のカテゴリー化というのが、たとえばニカラグアの中に見て取れないか、ということです。

ニカラグアにおいては形成すべき「我々」のポジションから、「我々」として未だ形成されざる、形成されなければならない人々が、いったん西洋の視座を通して見出されています。何とも逆説的に、範例たる西洋に倣わなかったがゆえに、かえって一層西洋の視座を介して「新しいニカラグア人」たらんとする「我々」のあり方を見出していくということです。それは、非対称の鏡像として、「同じニカラグア人」＝「我々」ではない人々を見出すことに他なりません。直接に、無媒介に相手と応答しあうのではなく、欠落した、未然の自己像を見出すという、二重、三重の屈折を通して、ミスキートたち、つまり将来的に形成され統合されるべき「我々」が、今現在のここにある「我々」に重ね合わせられていく。

そういった場合に、「引き裂かれの位置」というのがどうしても出てこざるを得ないだろうと思います。「固有性」が語られる場合、先住者なり原住者なりといったものと植民者との分別がしばしば言及されるわけですが、中央アメリカにおいては「メスティサーヘ」、つまり混血、雑種性を同時にもっているわけです。しかし、この雑種性がどんどん融合する方向に向かっていくのではなくて、内的異質性を抱えている状態に他ならない。その場合に、「我々」の中に自分の位置を核として置くことができない人々が必ずいるわけです。形成すべきものが今の自分のあり方の欠落として、何度も何度も繰り返して言及されてい

く。これを「引き裂かれの位置」とさしあたり名付けておきたいと思います。

これは、発展とある意味で照応しています。つまり、ナショナルな形での暴力（ゲヴァルト）による統合的観点としての「発展」の源泉的矛盾として、「文化の固有性、多様性」ということが語られる、という問題が出てくるのではないか。この場合の統合的な観点というのは、「発展」の政治を及ぼす領域を画定しなくてはなりませんから、ニカラグアであればニカラグア「全体」の「発展」ということが語られることを指しています。しかしながら、そのニカラグアの「発展」が様々な「内的異質性」を抱えていることで「阻害」されているとして、文化の多様性、固有性というものに矛盾を求め、それらをなくしていくものとしてある種の原動力に据え、実践の対象に繰り込まなくては統合的観点としての「発展」は出てこないとされたのです。ところがその「発展」というのは逆説的に源泉的矛盾、あるいは原動力として、固有や多様において語られる「文化」というものを求めている、ということです。

そうしますと、失敗の場合を考えるとわかりやすいのですが、「発展」という形でいわれているものは、全部が全部そうとはいえませんが、とりわけニカラグアの場合には、進化論的な時制のなかで語られてきた。これは、昨日よりも今日、今日よりも明日とよりよい状態になっていくという形での development ということです。しかしそれが、どこかで失敗であったと見られたときに、どこに立ち戻るのか。それは、「文化」という形で切断され、停止された、つまりそれが固有であると見られている、もしくはニカラグアの中に多様なものがあるんだと見られている「点」ではないでしょうか。その「点」は時間とは切り離されてしまい、そして「停滞」したその「点」に「固有」という名前もしくは「多様の中の一つ」という名前が与えられていく。そうした「文化」の語りへと何度も戻り、そしてそのことを新たに別の形で、「失敗しない」方向へと「発展」させていく、という実践が繰り返し始まる。これが副題につけた「ループ」です。

そうした意味においてこのループというのは、進化論的時制と、「文化」の語りの停滞との間の問題が、後者を参照項として必然的に伴いつつ前者に還元されてしまう実践です。「文化」という面から見ていけば、なにがしか別の意味を見いだそうとする認識的な実践との間の往復運動であったろうと思うわけです。

このような往復運動の中に出てくる表象というのは、固有とか多様ということが「全体」の中に求められる統合というよりも、むしろキメラ的なものになっているのではないかと思います。というのは、その場合の「文化」というのはある時点で切断されているわけで

すから、実際には同じ歴史的時間の中では当の「文化」は変わってしまうからです。すると、変わっていっている人々の姿に一旦戻ったときに、ズレが生じてしまう。そのズレをズレているとすることができないような傾向性が生じる際に、ある種の重なり合いが起きはしないか、と考えています。参照点として語られた「文化」と、そして現実とのズレを修正するべく双方を重ね合わせていったときに、矛盾が局所的に凝集していくのではないか。そのことがまた、「固有」としてあらためて語り直されるような機制が登場しているのではないかと言い換えることもできるでしょう。

最後に一点だけ付け加えますと、「内発的発展論」のナイーヴさが、おそらくオリエンタリズムに関わる問題として存在しているはずです。例えば、鶴見和子・川田侃編著の『内発的発展論』（東京大学出版会、1989年）を見ても、「内発的発展論」という概念は非常に漠然としていて、常にその根拠の一つとなっているのは、固有性への信仰というか、ヒューマニズムに満ちた、そこに生きている「特別」な人々の生き方を考えようという態度です。それが正しいとか間違っているとかいうことではなく、それがもっている力というのがどれほどのものなのか。あまりに楽天的に語られることによって、その力が、「語り」だけではなく現実の実践の中で行使される暴力に対してどこまでそれを解きほぐすことができるのかという点において、私はこの内発的発展論というのは非常にナイーヴなのではないかと思います。

質疑応答

冨山　この研究会といいますか、重点領域研究の中で「固有の発展」というのはたびたび議論になります。全体の総括研究会、また我々の数人の研究会の中でも、経済学者と文化人類学者における固有性の語り方の違いというのはいつも際だっています。たとえば「計測された時点で固有性はなくなる」という言い方があります。つまり、計測された時点で計測を可能にするベクトル空間が当然前提にされる訳で、そこでは単なる「固有」という設定とは違う議論になるはずだと。崎山さんの議論はまさしくその点にかかわっているのではないかと思います。そして、「計測された時点で固有性はなくなる」という議論の外で、これまでたてられてきた計測されない何かしらの個性を、風土や自然環境に還元するような言い方で議論をたてるのではなく、崎山さんの議論はおそらくそこにナショナリズム、ナショナルな問題というものを重ね合わそ

うとされているのではないかと思います。そして、それはまさしく小熊さんの出されている「力」という指標の問題とも関わるのではないかと思います。固有性の問題と、「力」の場としての固有性の問題、両者をどうつなぐのかということです。

あるいはまた、カンボジアの例を出されたのは、私には非常に的確な引き出し方ではなかろうかと思うわけです。研究会がまさしく東南アジアを中心としてたてられているそのときに、カンボジアというものが当然登場してくる。そのときのポル・ポトの語り方というのはもはや、ただの反乱分子のような語り方になっていくわけです。ところがカンボジアの問題は、固有というものをたてた時点でもう一度しっかり考えられなくてはならない極めて厳しい論点であると思います。

花田　離脱、delinking 論とは誰か具体的に念頭に置いている論者があるのか？

崎山　この場合、離脱という論を立ててゼングハースと論争しているのはサミール・アミンです。その離脱というのを片方として頭に置いています。